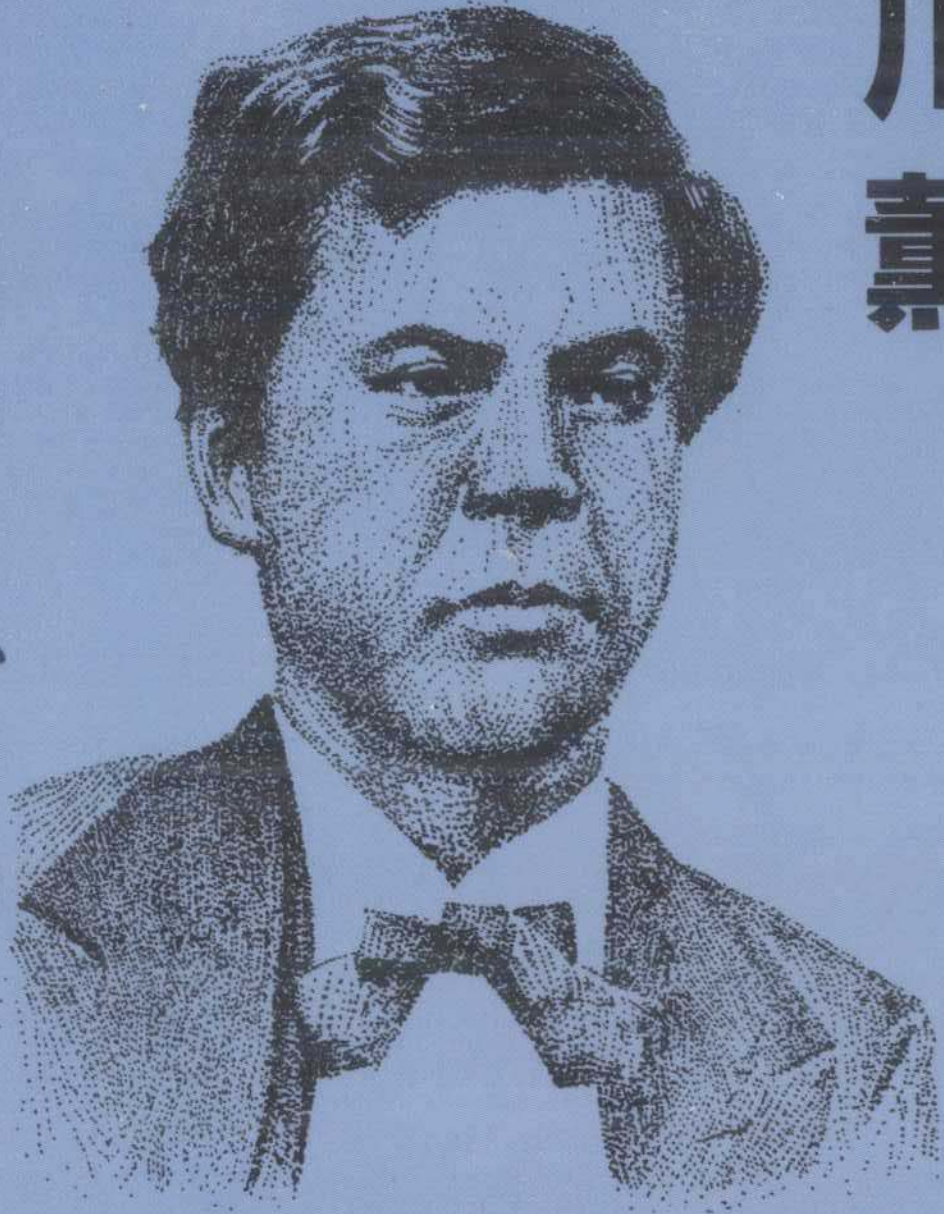


古川薫



桂小五郎

(下)

文春文庫



文春文庫

357-2

桂 小五郎(下)

定価はカバーに
表示してあります

1984年11月25日 第1刷

著 者 古川 薫

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-735702-X

文春文庫

桂 小 五 郎

桂小五郎（下）／目次

第一章 開戦前夜

鴻峯山麓／長州処分／南奇の脱走／四境戦争／晋作昇天

7

第二章 征討の旗

船中八策／大政奉還／小御所会議／慶喜去る／鳥羽・伏見

76

第三章 官僚の門出

京都へ／攘夷残風／五箇条の誓文／幕藩解体

143

第四章 旅次変転

浦上四番崩れ／諸隊の叛乱／米欧回覧

221

第五章 帰去来

征韓論／松菊枯る

288

文庫版のためのがき

317

解説 武蔵野次郎

325

桂 小五郎 (下)

第一章 開戦前夜

鴻峯山麓

——先日、私は山口市糸米いとよねにある木戸孝允の旧宅をたずねた。そこでまず山口盆地の秋色のことから、この物語を再開しよう。

紅葉をはじめた背後の山が、いちだんと家々の屋根を覗きこむように近づいて見える古都の初秋である。

町の三方をとりかこむ群嶽の主峰は鳳ほう翽べん山ざんで、標高七百四十メートル前後の東と西の峰に分かれている。その東鳳翽から発する一ノ坂川の清流も、秋を迎えて冷気を増しながら、人家の密集した町中を貫流し、榎かじの野川に合して、やがて瀬戸内海に臨む山口湾にそそぐ。人口約十万、県庁所在地としてはめずらしい小都市といえる山口の中心街は、盆地の北東部にあたる一ノ坂川扇状地にのせた静かな町並みである。

街区はやや中央付近で、小高い丘をなした亀山公園の森を突き抜けて、ザビエル記念聖堂の尖塔が、蒼穹を刺している。室町時代、西国を席捲した守護大名大内氏は、本拠をこの山口においた。スペイン人宣教師ザビエルが、山口にやってきて、わが国で最初の切支丹布教を開始

したのは、十六世紀の中葉であった。大内氏三十一代義隆の治下で、すでに終末近いころだ。領主の徹底した中央志向と貴族化によって、家臣団が分裂し、武断派の統領陶晴賢すえはるかたの叛逆で、防長の名族大内氏は崩壊した。ザビエルが、フェルナンデスに後事を託して山口を去ったわずか十数日後の天文二十年（一五五二）九月のことである。

二十四代弘世のころから義隆まで二世紀にわたって、大内氏の代々が、そのゆたかな財力を注ぎこんだ山口の町は、文字通り西の京都であった。ひたすらな京へのあこがれが、一ノ坂川を鴨川にみたてた模倣都市としての山口をつくりあげたのである。その小京都も、陶の叛乱により炎上、消滅した。劫火は八日間にわたって、秋晴れの山口盆地の空を焦がしたという。

滅びの秋といえば、それから五十年後の慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原の役も秋だった。中国八カ国支配の座を失い、広島城を追われて防・長二国に閉じこめられた毛利氏は、新たな本城を防府におきたいと望んで幕府に拒否され、さらに第二希望地の山口案も一蹴された。

しぶしぶ萩に本拠を築いたものの、山口には出先を設けて、ひそかに藩領中央部への執着をつなぎとめてきた。長州藩が、幕府に無断で萩を捨て、「山口移鎮」を決行したのは、文久三年（一八六三）である。即今攘夷の藩論が頂点に達し、関門海峡で外国艦船に砲撃を浴びせた年だ。

翌元治元年、禁門の変や四カ国連合艦隊来襲に惨敗した長州藩が、幕府の威圧に屈したのもその年の秋である。藩主敬親たかちかは、謝罪の一条件として山口を去り、萩に謹慎したが、ほとぼりがさめるとまた山口の政事堂を復活させた。

禁門の変後、但馬に潜伏していた桂小五郎が、九カ月ぶりに姿をあらわして、長州へ帰国し

た慶応元年四月当時には、早くも山口が藩政の府となっていたのである。

五月二十七日、政事堂用掛及び国政用談役心得を命じられた小五郎は、山口で暮らすことが多くなり、妻の松子も一緒だから、一戸を構える必要があった。

糸米に住居を持ったのは、明治になってからだという説もあるが、『史実参照・木戸松菊公逸話』（妻木忠太著）によると、慶応二年（一八六六）にここへ移っている。つまり京都での薩長連合盟約を終え、帰国してから、松子と糸米に落ちついたものである。もっとも小五郎は、京都から帰ると、萩や下関などへ頻繁に出かけ、また長崎、京都と飛びまわっている。山口のこの居宅に腰を据える暇はあまりなかったにちがいない。

糸米は、龜山公園下から南西へ、国道九号線に並行して走る細い道路を一キロばかり行ったあたりだ。障子岳に突き当たるようにして右に折れ、山手に最も奥まったところ、低い丘陵地の一部に木戸孝允旧宅がある。

国道九号線からいえば、下清水のバス停からわずか湯田温泉寄りの地点で交差する道を、右折して山手にむかって行く。道はしだいに細く、やや登り坂となり、にわかには山肌が接近してくる。兄弟山または土地の人が双子山と呼んでいる山の形が、ムスビを二つ並べたようで、いかにも箱庭めくというか、童話劇の書き割りに似たあどけない感じなのだ。

木戸邸は、双子山のふもとだが、東隣りにそびえる鴻ノ峯の南麓にもあたる。木戸孝允の死後、その遺志によって土地屋敷は地元で寄付された。そこで奨学制度の基金にするため売却したのである。だから今は、和菓子本舗山陰堂の社長竹原哲史氏が、ここに邸宅を構えている。竹原家の所有となったのは、昭和初年である。そのころは付近に人家もなく、ものさびしいと

ころだったらしい。

木戸孝允こと桂小五郎夫妻が、移ってきた当時、この場所には古びた武家屋敷があったはずで、藩士湯川平馬の居宅だったものを譲り受けたことになっている。古くは大内時代、代官屋敷がおかれていたともいわれ、邸内の庭にふくまれる一段高い山林の一部は、かなり広い平面を持ち、あきらかに拓かれた土地を思わせる。

そこからはるかに東山を望み、その手前に山口の市街地を俯瞰できる。朝日も、満月も東山から昇るのだ。

屋敷のすぐそばを小さな谷川が流れ、数百年を経た老松、また楓の大樹が枝をひろげて、鬱蒼とした庭園をつくる。小五郎は、よほどこの新居が気に入ったのであろう。「秋日山居」と題し一詩を賦している。

山松幾株色蒼々

峯頭時二看ル一草堂

荒径草深人跡少ク

細流瘦石残陽ヲ帯ブ

この中の「峯頭」とは、鴻ノ峯である。標高三百二十メートル、街角からも、ふと見上げるほどの高さで、山口の人の親近感をそそる。そして糸米の住人は、鴻峯山麓こうほうさんろくの静寂に、風流の心を養った。

かつてこの山都に弊衣破帽の青春を謳歌した旧制山高も、鴻ノ峯南麓の糸米にあり、その寄宿舍を鴻南寮といった。彼らは木戸孝允の旧邸周辺を遊歩しながら、金木犀の香に酔い、また

血の色をした楓の葉の間から鴻ノ峯を仰いで、青雲の志を燃やしたかもしれない。

鴻ノ峯には、大内氏が城を築きかけたが、乱世への備えを忘れた守護大名の砦は、まるでものの用に立たなかつた。陶晴賢の攻撃を受けると、大内義隆は、鴻ノ峯中腹にある法泉寺に入ったが、すぐに長門にむけて脱出した。

義隆が自刃し、大内の主流が滅んだあと、晴賢は、豊後の大友宗麟の弟晴英を迎え、大内義隆と改名させて、傀儡政権を山口においた。

ここで広島にいた毛利元就の登場となる。彼は嚴島で陶晴賢を討ったあと、大軍を山口へさしむけ、大内の「偽主」義長を攻めた。義長も山口を守りきれず、ただちに逃げて、長門国の長府に入り、長福寺（功山寺）で自刃した。

木戸旧邸からというと、鴻ノ峯と対称の位置に、障子岳が間近に見える。毛利軍の襲来と知って、この山には城の石垣と見せかけるため障子を集めて山腹に並べたという故事によって、その名がある。

京を真似た文化都市山口の、軍事的にはまことにひ弱な話がまつわる二つの山を南北に見る屋敷に、桂小五郎はひとときの休息を味わいながら、来るべき幕府との決戦に備える長州の強兵策を練ったのである。

そこからほど近く、同じ鴻ノ峯南麓には普門寺ふもんじがある。小五郎が最も頼りにしている西洋兵学者村田蔵六は、そのころ普門寺に三兵塾をひらいて、士官養成の軍事教育をはじめていたのである。薩摩との提携、新式小銃の大量密輸、それに洋式訓練の実施と、長州藩の対幕戦準備は着々と進んでいた。

糸米の自宅から鴻ノ峯のふもと伝いに白石、春日町を通過して滝町の政事堂にかよう馬上の小五郎の姿が断続的に見られたのは、慶応二年からおよそ二年間である。

小五郎と松子にとって、糸米の屋敷は、文字通りの新居であった。

二人が結ばれたころの京都は、血風吹きすさぶ不穏な日々がつづいていた。白刃の下をかいくぐる思いをしながら確かめあった愛は、それなりに深い思い出を遺したが、やはり落ちついた夫婦らしい生活を、絶えず夢みていたにはちがいない。現実には、逆に二人を引き裂いた。小五郎は但馬へ、松子は遠く対馬にまで逃避の旅を強いられたのだ。

世間並みにいうなら、苦勞の甲斐があつて、ようやく一戸を構えることができた。山口がかつて西の京といわれた土地だと知つて、松子は長年住みなれた京の面影をなつかしんだことであらう。

新婚の喜びを、あらためて味わつたとしても、小五郎は座のあたたまる暇もなく、外を飛びあるいている。慌しい時代に活躍する男たちの妻が、すべてそうであつたように、松子も多くの日を留守居妻として暮らさなければならなかつた。

この屋敷は、一軒だけいわば人里離れた山ふところに抱かれる位置に建つていた。南風が、まともに吹きつけてくるが、双子山と鴻ノ峯の谷間に吸われるのか、建物には風があたらない。しかし、夜など耳をおおうほどの山鳴りが、家をとりのつむのである。

半年余りの対馬での生活で、田舎暮らしに多少慣れたとはいへ、松子にとって、糸米はひどくものさびしいところだった。

しかし、小五郎が在宅するとなると、次々に訪問客があつて、とたんに賑やかとなり、松子

も多忙な家事に追われた。ここにはいろいろな人がやってきた。薩摩の大久保一蔵や土佐の田中顕助も来ている。

糸米時代について、後年の田中光顕が次のように語っている。彼は土佐勤王党解体後長州に亡命しており、小五郎が薩長連合の件で京都へ行ったときも随行しているので、かなり頻繁な接触があった。

「私が木戸公に初めて面会したのは、但馬から帰国して、馬関におられた慶応元年であった。……木戸公が山口の糸米に住居せられた時に、私が其の宅に参つて、種々の話を聞いたことがある。或る日、公の夫人の翠香院が、私の着物は垢染みて臭気が甚だしいから、洗濯しましようと言つて、別の着物を出された。それは公の着物であつて、之を借りて着たこともあつたのである……」

翠香院とは、孝允の死後、髪をおろした松子の法名である。ちなみに明治十年に孝允が死んだあと、松子は九年後、四十四歳で世を去っている。

慶応二年、糸米に住んだとき、小五郎が三十四歳、松子が二十四歳である。田中光顕のこの回顧談は、賢妻といわれた松子の横顔を、さりげなく紹介したものといえるだろう。

糸米の屋敷は、相当に老朽化したものであつたらしく、大工を入れて増改築し、見違えるほどの邸宅になったが、それらはすべて松子の指揮によるものだった。

田中光顕は、次のようにも言っている。

「高杉晋作も、常に木戸公は長者であると言つていたが、人に対しては余程親切であるから、何事も打ち明けて話が出来る。そして、私共にしばしば言われるに、人は貧乏しない心掛けが

必要で、常に費用を慎まねばならない、もし借金したら、人に頭が上がりなくなる……」

裕福な医者の子に生まれた小五郎は、生涯を通じて経済的にめぐまれた生活をおくった。それはまた浪費を慎む資産階級の心構えとして彼の身についたものである。

糸米のこの屋敷は、そうした彼にふさわしい面目を整えていたにちがいないが、現在の竹原邸は、そのほとんどが建てかえられている。木戸邸時代をしのばせるのは、裏庭の二階建て一棟が、なおしつかりした骨組みで遺されているだけである。

ところで、私は前巻の情性もあって糸米時代の彼をも、なお小五郎と呼んでいるが、正確には木戸貫治、または準一郎である。このあたりでぼつぼつ木戸姓に改めなければならぬだろう。

木戸姓になってからの彼は、三度名を変えている。初めが貫治、それから準一郎となり、そして孝允を名乗った。

桂小五郎が、木戸貫治となったのは、慶応元年九月二十九日で、これは藩命によるものであった。前年の秋から、小五郎は幕府のお尋ね者になっていたのである。広島へやってきた幕府の大目付永井主水正もんどのししやうが、岩国藩主の吉川経幹きつかわつねまさを呼びつけて詰問した条項の中にも「桂小五郎、高杉晋作は如何にせしか」という言葉が見える。経幹は「居所不明なり」と逃げた。高杉は福岡へ、小五郎は但馬に潜伏中で、居所不明というのは事実である。

幕府が長州再征の勅許を得たのは慶応元年九月二十一日で、小五郎に改姓の藩命が出たのはその八日後だった。さらに十二月には村田蔵六も姓名を変更するよとの藩命を受けた。蔵

六はフイーパン号事件（上海での武器購入）の主役として幕府が追及している人物である。

蔵六は大村益次郎となり、小五郎は木戸貫治となった。この時期、長州藩を背負って立つ二人が、相次いで改名したのである。それは、単なる姓名変更でなく、小五郎にとっても蔵六にとっても、新しい人格に生まれかわるときであった。

百姓あがりの蘭学者村田蔵六は、軍制専務という肩書きの軍師として、長州藩軍事組織の頂点に立つ大村益次郎となり、やがて明治新政府の兵部大輔にのしあがるのである。

そして、志士桂小五郎は、一藩の枢機をあずかる木戸貫治となり、明治新政府の官僚木戸孝允への道をまっしぐらに歩みはじめののだ。

小五郎が選んだ木戸姓が、どこからきているのかは定かでない。一説によると、妻の松子の出身地の字をとったものというが、あるいはそうかもしれない。

とにかく木戸貫治を名乗ったのは、それからまる一年間であり、慶応二年九月二十七日には、再び藩命を受けて準一郎と改名している。

その年六月から始まった第二次長州征伐の幕軍との交戦は、長州藩の圧倒的勝利に終り、九月初めには、幕使勝安房と休戦条約を厳島で交わしている。桂姓を捨てたときほどの理由は見あたらず、この改名が何によるのかはついにわからないままである。どの伝記類を見ても「再び命を以て氏名を木戸準一郎に改む」としているだけで説明がないところを見ると、特別詮索するほどのことはないのかもしれない。

「孝允」の諱は、かなり早くから使っており、嘉永六年、藩に提出する建言書の添削を、吉田松陰に依頼したときの署名もこれになっている。しかし、貫治、準一郎に代わって、孝允を通